カリスマの勝負強さと真の価値

伝説の航跡

百物語

文　鍋島ヒロシ

「僕は勝負強くないから」

同じ言葉を、スーパーアスリートとスーパーレーサーが言った。ひとりは大谷翔平、もうひとりは松井繁だ。

前者に関しては、得点圏打率のことが話題になる。今年もまたシーズン序盤は悪かった。しかし、昨年は終盤に鬼のように打った。最終的には打率3割1分0厘に対して、得点圏打率2割8分3厘まで近づけた。その前年が3割0分4厘に対して3割1分7厘、3年前が2割7分3厘‐3割1分4厘。初めてMVPに輝いた21年は、打率2割5分7厘ながら本塁打46本で、投手として9勝を上げた。ちなみにこの年の得点圏打率は2割8分4厘だった。

こうして見ると、ランナーを得点圏に置いた方が総じて数字はいい。そして結果的に二つの数字は接近する。メジャーでは得点圏打率などさほど重要視していないようだ。エンゼルス時代は特に「サヨナラ」とか「満塁」とか、派手な本塁打があまりなかったことが、勝負強くないと言わせているかもしれないが、そもそも勝負を避けられる場面も多かった。

大谷翔平というアスリートは、メンタルよりスキル、スキルよりもフィジカルを優先事項としていることを、明言している人物だ。精神論から遠いところに、自分を置いているのが気持ちいい。

と、これはボートレースの記事である。松井繁について書かねばなるまい。プロたる者として獲得賞金を重要視するレーサーだ。年間表彰の部門でも、勝率トップが2度に甘んじているのに対して、獲得賞金1位が5度。通算では断トツの41億円を超える賞金を稼ぎだしてきた。SGV12は野中和夫の17回に次ぐ2番目、記念V72も彦坂郁雄の77回に次ぐ2番目。安定感が素晴らしい。

【野中と松井のSG優出―優勝】

野中和夫（38―17、2着2回）

松井　繁（68―12、2着14回）

偉大で特異な同支部の先輩レーサーと並べると、松井が勝負強くないというのがよく分る。というよりもう一人が異常に勝負強いのだが。

野中は38回の優出機会を17回モノにした。確率実に41・7％。現在のSGハンターだと思う石野貴之が31・4％（35優出11優勝）だから、まさに突出している。キャリアの割に優出回数が少ないのは、もちろん選手生活の半分が、年間にSG競走が4つしかなく、最後の優勝が、現存する8つめのSG競走であるオーシャンカップの創設時。そんな時代を生きてきたからだ。

松井は比べる相手が悪いのかもしれない。野中は優勝17に対して2着は2回しかない。ともに中道善博に2マークで差し返されてのもの。このグラチャンとグランプリは、稀代のテクニシャンの名演を代表するものだ。ここでも野中

伝説の航跡 百物語

は先行していた。優勝戦は勝たなければ意味がない。さすが自分を勝負師から負けを外して、〝勝ち師〟と称しただけはある。

一方、松井は時代に恵まれたといっても、圧倒的な優出回数を誇る。そして優勝より2着が多い。そのことが勝負強くない所以になるか。それより悔しいのが、現代ボートレースの場合は、優勝戦1号艇での敗戦だ。68回の優出の中に5回ある。

◎01年児島　CC3着(西島義則)
◎02年尼崎　AS4着(西島義則)
◎05年下関　GC4着(山本浩次)
◎06年福岡　DB6着(魚谷智之)
◎12年住之江GP2着(山崎智也)

最初の2回は西島義則にしてやられた。前年にSG三連覇、ボート史に残るトリックスターが、個性を輝かせてイン松井を打ち破った。

児島のチャレンジカップは、一言で言うなら、深い進入に対する経験値の勝利だった。5枠に組まれた西島は、いち早く回り込んで2コースをキープ。松井の横にピタリと付けた。80まで入るのも織り込み済みだった。むしろ付き合わされて流れ込んだ松井のスタートが鈍った。3コーススローの今垣光太郎もスタートを放った。

「今日のレースを見ていたら、インのターンは流れていたからね」

西島の読み通りだった。松井のターンは案の定流れた。今垣が付いてこられなかったこともあり、余裕を持って外に張りながら差せた。ここで勝負ありだった。松井は2マークで後続の仲口博崇にも交わされた。「失敗した」レース後に唇を噛んだ。

翌年の尼崎、笹川賞では、西島が松井の心理の綾を見事に衝いた。この優勝戦、1号艇に松井なら2号艇に上瀧和則という盟友のライン。西島は敢然とピットを飛び出して、二人の外に付けた。

とにかく1マークのターンが秀逸だった。松井が逃げて、上瀧は差しが内の算段。実際、松井はトップスタートから1マークを先取りした。上瀧は落として差し構え。その瞬間、西島のまくり差しが飛んできた。上瀧の頭を叩いて、松井の内をえぐった。バックへ一気に躍り出た。

勝利の構図を崩された松井は、2マーク全速で逆転を狙うも、既にリズムが狂っていた。跳ね返されて大きく飛んだ。更に後退し今垣が浮上した。西島が不敵に勝利を決めた。

「自分でもビックリした」

西島は想定を超えるターンを決めた。「差されるとは思ってもみなかった」失敗した覚えがなかっただけに、松井は余計にショックだった。ボートレーサー西島が、最も脂がのり切っていた時期である。

「松井はイン屋じゃないから」

西島は児島の時、こんな言葉を口にした。そして2年続けてSG優勝戦で、インの松井に辛酸を嘗めさせた。この時の言葉、この時の振舞いに、イン屋としての西島の、自負心や矜持を感じる。

もっとも当時はそれなりの重みをもった言葉も、その後の歳月が軽くしてしまった。枠なり進入が定着した現在に、典型的なイン屋などいない。誰もが1号艇に組まれた時には、気持ちを入れて逃げ込みを図る。イン屋じゃないと言われた松井自身が、イン戦の堅い代表的な選手となっていった。

だからこそ敗れた時に大波乱となったのが、05年の下関、グランドチャンピオン優勝戦だ。このレースは1号艇に松井繁、2号艇が今村豊。本命・対抗がはっきりしていた。ただし、スタート展示で江口晃生が2コースに寄り付いた。

この江口が本番では、一旦寄り付きながら外に逃げた。予想以上にスロー水域の競り合いが激しくなったからだ。進入自体は枠なり3対3に収まったものの、スロー3艇は江口につられて100より深く流れ込んだ。4コースが絶好のカドになった。

そこにハマったのが山本浩次だ。このシリーズはスタートが決まっていた。「自分が行くと言ったときは絶対に行きます」と、コンマ11の全速ダッシュを見事に決めた。大外に回った江口が差して2着。スロー勢では今村が3着に残した。3連単配当6万390円は、23年のオーシャンカップで大きく塗り替えられるまで、長らくSG優勝戦最高配当として残った。

「あんな進入では…」と敗因を語った松井は、翌年のダービーは福岡の1号艇で走るには機力不足で、12年のグランプリは山崎智也の素晴らしいまくり差しに敗れたが、その後はSGV8中7つをインで勝ち取った。

野中　①4②3③3④1⑤5⑥1
松井　①8②1③1④0⑤1⑥1

これは野中と松井のSG優勝コースの内訳だ。野中の時代は奔放にレースを作れた。いまはコース取りが枠に縛られ、スタートに対するプレッシャーも相当にきつい。その中で松井は実績を上げ、それ以上の惜敗を積み重ねてきた。松井は時代に恵まれた…と書いたが、そうとばかりは言えないことを、最後に付け加えておきたい。

第4回チャレンジC優勝戦

着	枠	選手名	コース	ST
1	⑤	西島　義則	2	08
2	⑥	仲口　博崇	6	16
3	①	松井　繁	1	12
4	③	田中信一郎	5	14
5	④	今垣光太郎	3	11
6	②	野澤　大二	4	13

3連単 ⑤⑥① 20260円 差し

第29回笹川賞優勝戦

着	枠	選手名	コース	ST
1	⑥	西島　義則	3	13
2	⑤	今垣光太郎	4	15
3	②	上瀧　和則	2	13
4	①	松井　繁	1	11
5	④	矢後　剛	6	16
6	③	瓜生　正義	5	15

3連単 ⑥⑤② 13600円 まくり差し

第15回グラチャン優勝戦

着	枠	選手名	コース	ST
1	④	山本　浩次	4	11
2	⑥	江口　晃生	6	11
3	②	今村　豊	2	15
4	①	松井　繁	1	19
5	⑤	山崎　智也	5	11
6	③	仲口　博崇	3	19

3連単 ④⑥② 60390円 まくり